評価要素 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26

評価対象者 教員→児童生徒

自分軸を大切にする評価

箕面こどもの森学園
佐野 純

生徒数・児童数	60名	教員数	15名

箕面市は古い歴史を持ち、箕面の滝を代表とする自然の豊かさが残る地域である。近年では開発が進み、大部分が都市化。本校のある地区も宅地開発が進んだ。本校は小さな民家を借りて開校、その後今の場所に大きな住宅のような校舎を建てて移転。さらに中学部を開設し、敷地内に中学部校舎を建てた。開校当初からフレネ教育をベースにイエナプランなども参考にスタッフ全員でカリキュラムを作ってきた。子どもの意思を尊重し主体的に学ぶことを支援する在り方が ESDに合致すると認められ、ユネスコスクールに加盟。その後サステイナブルスクールやハッピースクールにも選ばれた。低学年・高学年・中学部の 3クラスがあり、異学年で一緒に自分で基礎学習計画を立てる個別学習、自分の好きなことを計画し実行して振り返りをするプロジェクト学習などに取り組んでいる。

評価手法の目的と内容

目 的 リフレクション（内省）を小さく重ねて自分軸を育む

学びにおいて、リフレクション（内省）が重要であると考えている。むしろ内省がないと学びが生まれないという考えがあった。学びとは世界を広げること、自分自身が変容すること、そのために内省が必要である。

一つひとつの内省が小さな落ち葉のようなイメージ。「フルコースよりもおばんざい」という言葉を参考にした。フルコースは派手で見た目は良いが、その時だけのもの。それよりも日々のおばんざいのように小さな学びをいかに積み重ねるかがポイントであると考えた。

そのため、人と比べる必要はなく、生徒自身の実感としての成長があればよい。この点においては到達度が必要なわけではなく、数値で評価して他の人と比べる必要もない。教育とは一人ひとりが自分として生きようする営みをサポートするものと考えている。それを教師も自分自身としてその営みを続けつつ、伴走者としてともに作っていくような関わり合いをしている。

内 容

＜主な手法＞
- 毎週、毎学期の生徒自身の振り返り
- 毎週、毎学期のスタッフ（教員）からのフィードバックと学期末の個別面談
- 毎週、毎学期の保護者からのコメント

＜成果に関連する実践＞
- テーマ学習（※）など他の学習の振り返りとフィードバック
- 研究発表会での生徒同士の感想
- 毎週のスタッフ会議でのスタッフ間の子どもの様子の共有、声かけや接し方についての議論

（※）テーマ学習の内容に関しては『変容につながる 16のアプローチ―SDGsを活かした学校教員の取組』を参照

評価手法を適用した実践

Aさん（中学生）の学びの成果と評価の実践がどのように関わっていたのかについて、話し合いでの発言や役割の担い方の部分を取り上げて具体的に紹介する。

Aさんは中学部に入学した当初は集会などの話し合いの場面では、その場にいることが精一杯でほとんど発言はなく、思ったことがあっても発言できなかった。司会や記録などの役割も担うことはなかった。スタッフ（教員）から、学校ではチャレンジしていってほしいと伝えたり、少しでも意見が言えたことをフィードバックし文章で伝えたり、個別面談で話をしていったりするうちに、少しずつ意見が言えるようになった。また、話し合いの役割も担うことができるようになり、小中学生が集まる全校集会でも司会を務めることができた。その時のことを自分で振り返り、納得のいくような司会はできなかったが、反省点が見つかったのでよかった、というような前向きな振り返りができていた。

その過程で、毎学期の目標や毎週の振り返り、学期末の振り返りを個人作業でじっくり取り組むことと、それに対してスタッフ（教員）からの文章によるフィードバックと個別面談で話を聞いたり声かけをしたりすることを続けている。それによりリフレクションができ、生徒自身が自分の目標に前向きにチャレンジすることができている。

実際の生徒本人の振り返りの変化とそれに関わるスタッフのコメントは以下の通りである。
※スタッフが特に変化を感じた箇所についてハイライトを引いている。

Aさんの振り返り ・思っていることを言っていなかったりしていて、声に出さないと伝わらないから、そこは全然協力できてないのかなと思いました。 ・全然手を挙げて意見をいうことができなかったから、もう少し意見を言えるようにがんばりたい。思ったことを言えるようになれたらいいなと思った。話を聞いているだけで、自分は話し合いに参加してないような気がした。 ・役割はそんなにやってなかったけど、ちょっとは参加できたのでよかった。役割は慣れていかないとだめだなと思いました。 ・役割で司会をやってまとめるのが難しかった。どんな風に話せばいいのか分からない。

教員（スタッフ）からのコメント ・自分の意見を伝えたり、人と対話したりすることを大切にしているので、思い切って積極的に参加してみてください。自分が思ったことや考えたことは、ためらうことなくどんどん出していってくださいね。 ・話合いでは少しずつAちゃんの意見を伝えてくれていたね。また記録の役割もチャレンジしました。友だちと一緒に何かをする時に、相手の意見を大切にする一方で判断を人まかせにするところが気になっています。自分がどう思うのかも、少しずつ伝えていけたらいいなと感じています。 ・話し合いの場面では、他の人と意見が違っていても、自分の意見をちゃんと伝えていたのが素敵だと思います。 ・話し合いでは、なかなか自分の意見を言うことができない感じもありましたが、グループ

の他のメンバーがいない時は自分から案内するなど、全体への働きかけも経験できたね。この流れで役割を引き受けることもやっていこう。やったことのないことに、まず一度挑戦してみるということがこどもの森では期待されています。　・集会では、なかなか積極的に役割に手を挙げたりたくさん意見を言ったりすることは難しいけど、共同の活動の中で発言する機会も増えてきたね。持ち回りで司会を経験できました。着実にできることは増えていると思うので、それを確認しつつ、これから役割にもっとチャレンジしていって経験を積んでいこう。　・ファミリーグループの意見をまとめて発表してくれて頼もしく思いました。クラス集会では記録を中心に、役割を引き受けました。全校集会の司会にチャレンジしました。スタッフのサポートも受けながら、意見を確認しながらまとめ、役割をしっかり務めることできましたね。とても貴重な経験だったはずです。話し合いでは、自分の意見を伝えてくれることが増えてきました。

Aさんの振り返りの変化　・人とのコミュニケーションが難しいと感じなくなった。　・役割をやることが多かったのではないかと思った。話し合いでの役割は積極的にできたと思った。　・（全校集会の）司会をやってみて難しくてうまく進められなくて残念やったけど、やってみて自分に足りないことに気づいたからよかった。　・（役割をしたり意見を言ったりすることにについて、入学した時と比べると）前は何かあったら逃げていて、楽な方にしていた。今は自分からいろいろできてきている。前は思っても行動できなかった。

決められた評価軸によって評価して他の人と比べるのではなく、それぞれの自分軸を一緒に作ることも含めてフィードバックをしながら伴走していくようなイメージで関わっている。振り返る機会をたくさん設け、定期的に個人的に話をして、その積み重ねで少しずつ変化のきっかけが掴めるようになっている。

評価手法開発までのプロセス

発想の原点　**～子どもひとりひとりへ、エンパワメントになるフィードバックを～**

そもそも評価手法を開発しようとして始めた取組ではなく、学びを作っていくためには内省やリフレクションが大切だという発想から始まっている。つまり始まりは評価するための評価ではなく、大人の目線でフィードバックをすることで生徒をエンパワメントし、生徒自身のリフレクションによる変容を促すための取組である。テストや通知表などのような数値による評価を一切おこなっていないので、評価と呼べるものはこの取組ということになる。

参考にしたもの　フランス発祥のフレネ教育の取組を参考にしている。実際のフレネ学校では、毎週の学習の振り返りがおこなわれ、コメントだけでなく、さまざまな学習プログラムについて個別に簡単な自己評価する折れ線グラフのようなものがある。それを参考にすることも考えたが、言葉で伝える方が良いだろうと考え、コメントによるフィードバックをすることにした。

開発から今までのプロセス　**＜第１段階＞全校生徒数 10名程**

毎週の振り返りとコメント　フランスでフレネ学校を見学し、毎週の学習計画の際の振り返りでコメントを書くことを始める。子どもが自分で一週間を振り返る。スタッフがコメントを書き、それを自宅に持って帰り、保護者からもメッセージをもらう。

学期末のコメント　数字で評価するより文章で学んだことを伝えようと考えた。スタッフ会議の中で議題として取り上げ、一人ひとりのことを話し合ってその場で文章にしていた。かなりの時間をかけて話し合いながら書いた。手書きで書いたり、イラストを描いたり、それに色を塗ったりしていた。それを渡し、一人ひとり個別に話をする時間を取っていた。なお、生徒自身も学期の振り返りを文章で書き、長期休み中に保護者が生徒に対してコメントを書いていった。

＜第２段階＞全校生徒数 20～30名程

毎週の振り返りとコメント　変化なし

学期末のコメント　生徒に関わったスタッフ一人ひとりが「学習面」「生活面」の 2つの側面について、コメントをデータで入力し、文章を集め、校長が編集して 1つの文章にしていた。それを渡し、一人ひとり個別に話をする時間を取っていった。

＜第３段階＞全校生徒数 30名～60名程

毎週の振り返りとコメント　ワークシートをアレンジし、「基礎学習」「テーマ学習」というような学習のプログラムごとに書く欄を設け、プログラムごとに振り返る形に変更した。全体的に振り返ると漠然として書きにくかった様子があったが、これによって書きやすくなった。

学期末のコメント　毎週のコメントと同様に学習のプログラムごとに書く欄を設け、全てを全員が書くのではなく、スタッフ会議で話し合い、特に書きやすい部分を検討して担当を分け、クラウド上のファイルに共同編集の形で書き込み、最後にクラス担任が全体をチェックし、最後に学園長と校長が確認して完成させるスタイルになった。それを渡し、一人ひとり個別に話をする時間を取っている。この頃から、どちらかというとメッセージ性の高い文章から学習の記録的な意味合いの強い内容になっている。

テーマ学習・プロジェクト学習の変化についても合わせてブログ記事にまとめている。
https://kodomono-mori.com/blog/chugakubu/?p=8477

評価手法開発にあたり参考にした文献・書籍・教材

- 辻 正矩 、守安 あゆみ他（2013）
  『こんな学校あったらいいな : 小さな学校の大きな挑戦』築地書館
- 辻 正矩 、藤田 美保他（2019）
  『みんなで創るミライの学校―21世紀の学びのカタチ』築地書館

問い合わせ先

学校名	箕面こどもの森学園
氏名	佐野 純
電話番号	072-735-7676
住所	大阪府箕面市小野原西6-15-31
メールアドレス	j.sano@kodomono-mori.com

学校現場（部門・学年・習熟度等）の現状と先生方の知見を加味して基準を検討していくことで、より適した評価を設定することができる。子どもたちの発達段階に適したプログラム構成・コーディネーターの活用、そして長期的に事業を進めていくためには、持続可能性を考慮して実現可能な内容を設定し、その先のつながりを意識した評価を検討していく必要がある。

■ SDGsを通して未来を担う子どもたちを地域で育てたい

本事業への参画を通して、自分自身も理解が深まり、SDGsの学びを多くの学校に届ける活動を続けていきたいと強く感じた。現在は、学校職員（キャリア教育コーディネーター）として学校現場に関わっているが、私のようなコーディネーターが関わる最大のメリットは、新たな取組を始めるきっかけを生むことであると感じる。児童・生徒のやる気や個々の持つ能力を引き出す機会が増え、さらに地域との関わりを活動に取り入れることができれば、地域で人材を育成するという意識を生み、学校と地域社会が相互に良い関係を築く糸口となるかもしれない。持続可能な社会の構築のためのキーワードが SDGsであり、誰一人取り残さない持続可能な社会の実現のために、未来を担う子どもたちがその学びを受けられるよう、学校現場に教育を届けていきたい。

〔※1〕 キャリア教育コーディネーターとは、地域社会が持つ教育資源と学校を結びつけ、児童・生徒等の多様な能力を活用する「場」を提供することを通じ、キャリア教育の支援を行うプロフェショナルである。（※ガイドラインより抜粋）

〔※2〕 2030アジェンダ（正式名称：持続可能な開発のための 2030アジェンダ）は、国連が 2030年までの新たな持続可能な開発の指標を策定したものであり、SDGsが中核となっている。

参考文献

・経済産業省（2010）「キャリア教育コーディネーター育成ガイドライン」

・国際連合広報センター（2021年 2月現在）持続可能な開発のための 2030アジェンダ
https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/

・一般社団法人 Think　the Earth（2018）
『未来を変える目標 SDGsアイデアブック』紀伊国屋書店

・文部科学省（2019）
「〔総合的な探究の時間編〕高等学校学習指導要領（平成 30年告示）解説」

・ACCU（2020）『変容につながる16のアプローチ―SDGsを活かした学校教員の取組―』

【プロフィール】　見目 友香（けんもく ゆか）

埼玉大学教育学部卒。教員免許（小学校・中高〔英語〕・特別支援）、認定キャリア教育コーディネーター資格を保持。先生方の気持ちの分かる学校職員がいたら、学校と地域の架け橋になれるのではないかと思い、教員という道を選ばず学校職員（キャリア教育コーディネーター）として群馬県内の学校を中心に現場の先生方と一緒に授業プログラムを企画・実施をしている。

COLUMN 2

箕面こどもの森学園を訪ねて

―箕面こどもの森学園へ行ってみたいのですが…

参加者の 1人から声があがった。今年度は新型コロナウイルス感染症の影響もあり、参加者同士、オンラインでしか対話の場を設定することができなかった。そのようことからも、実際に学校や子どもたちの様子を見たり、参加者同士が対話したりする場は貴重だと思った。

当日、関西地方の 2名の教員が学園を訪問し、学園内を見学、その後オンラインもつなぎながら振り返りの会がおこなわれた。本事業や冊子のテーマにもなっている評価に関しても話すことができ、有意義な時間となった。当日訪問した 2名の先生方の声と、受け入れ側であった箕面こどもの森学園のスタッフの声をシェアしたい。

神戸市立摩耶小学校
阪井 園子

まるで、お家に招かれたような、かわいい学舎にワクワク感が高まる。

午後のプロジェクトの時間を見学した。ホールで、裸足でサッカーをする低学年。道具や材料が置いてある所から必要な物を選んで、自由に制作活動をする低学年。スタッフのアドバイスを貰いながら作っている子もいる。ミシンや手縫い、木工、ダンスなど、さまざまな場所でさまざまな活動を繰り広げる高学年。中学生は、ギターを弾いたり、読書をしたり各々で、黙々と数学の問題に取り組んでいる子の姿もあった。しかし、前に立つ先生の姿はない。何をするのかを自分で計画し実行している様子は、個々が持つファイルからうかがえる。使用する部屋は特に決められておらず、その調整も自分たちでするというのに驚いた。案内してくださった佐野先生（さのっちとみんなから呼ばれている）の、「自分が一番したいことを見つけることも学びの一つ」という言葉が印象的だった。

このように主体的な学びを支えているのがスタッフと呼ばれる先生たち。スタッフも子どもたちも「コクレオの森」（箕面こどもの森学園を運営する NPO法人）の一員として、みんなで創造的で共同的な学校生活を作っている。スタッフは子どもたちに価値観を押し付けるのではなく、子どもたちが個性を伸ばしていくためのサポートに徹している。行事等を含め、基本的なことから何でも話し合いで決める、民主的な学校運営は素晴らしいと感じた。20〜24人に対して 2，3人のスタッフがいるというのも手厚い。

見学後、質疑応答のみならず、今回のテーマでもある評価について話し合われた。公立学校に勤務する私にとって一番の驚きは、宿題もテストも数値評価もなく、コメントや個別面談で評価を伝えているということ。もともと評価というよりは、子ども一人ひとりをエンパワメントするためのフィードバックから始まったということだった。

公立学校では、今年度から新学習指導要領が完全実施となり、「知識・技能」「思考力・判断力・表現力等」「学びに向かう力・人間性等」の 3観点で評価をおこなっている。箕面こどもの森学園では、後者の 2観点に関しては、素晴らしい伸びが期待できる一方で、「知識・理解」に関しては、個々に差ができると思われる。もちろん、公立学校でも個々の差は見られるが、基本的な知識・技能を学ぶ機会に関しては均等であると考えるからだ。基礎学力に関しては、スタッフの中でも議論が繰り返されており、特に中学生では習熟度のテストの実施を検討しているそうだ。でも、このような議論ができること自体が、主体的な運営の表れであろう。

社会のグローバル化と価値観の多様化に伴い、集団に適応することに困難を感じる子どもたちが増えている。公立学校では、不登校、発達・学習障害、ハイリーセンシティブチャイルドなど「個々への対応」と「集団の学び」との兼ね合いに苦慮している。35人の子どもたちの個性を一人の担任で伸ばすことが求められ、GIGAスクール構想、英語、プログラミングなど新しい変化にも対応しなければならず、現場の疲弊感は否めない。教師が元気でゆとりをもっていなければ、子どもたちによい教育などできないと感じている。

私事ではあるが、大学の卒業論文テーマが「自由教育」であった。また、青年海外協力隊員としてカンボジアで教鞭をとり、ニュージーランド、アメリカにも海外派遣された経験がある。このように国際教育に携わってきた私にとって、ますます自由教育やサステイナブルスクールに興味が沸いてきた見学となった。日本社会の中に、居場所的なフリースクールだけではなく、コクレオの森のような自由な学びができる学舎があることを嬉しく思う。

関西学院千里国際中高等部
米田 謙三

見学前に子どもは自ら学ぶ意欲を持ち、自らの力で学ぶことができるという学習者中心の教育観に立ち、子どもたちが創造的で共生的な生き方を身につけた自立した人間に育つことを支援していると案内された。そのあと、校内見学でその教育観を実感することができた。

小学部と中学部の取組を見学しながら感じたことは、事前のお話の通り一人ひとりが個人として尊重され、互いに尊重しあう関係性づくりをしているため、人と違っていてもそのことを誰も気にしていないこと。安心して仲間や大人たちと過ごせる環境の中で、子どもたちの感性や知性が伸びやかに育っているということだった。

評価というキーワードにおいて、小学部では、例えば「ことば・かず」の時間で必要な読み書きや数量の概念、計算の技術など一人ひとりが立てた学習計画のもと個別学習を進めていく。その上で、それぞれがファイルを作成し担当スタッフが随時コメントし評価をしていく。中学部での、クラス全員で決めた 1つのプロジェクトに全員で取り組む「共同プロジェクト」の時間では、学校に図書館をつくったり、夏祭りで喫茶店をしたりする。その上で、これまでの取組や成果がアーカイブとしてファイルに整理され、いつでも参考にできる形になっていた。実際の成果も記録されており、興味深い。また、毎朝ハッピータイムという時間があり、家でのできごと、通学中に見たこと、昨日見た夢のこと、うれしかったことなどを自由に話す時間があるそうだ。また一日の最後に、クラス全員で「今日の振り返り」のミーティングも実施されているとのこと。最初、言葉数が少なかった子どもが、この積み重ねによってどんどん言葉数が増えていったという事例も聞き、この時間は生徒・児童にとって本当に大切な時間なのだと思った。

今回訪問し、改めて目標と評価の一体化の重要性、及び思考の表現を生み出すことを意識しながら、見通しをもってカリキュラム設計を考えることで、目標、指導、評価の間の一貫性を確保する必要があると感じた。

箕面こどもの森学園
佐野 純

本事業を通して評価というテーマで対話を重ね、深め、自校の実践について振り返り、校内でも話し合い、最終的に冊子掲載原稿としてまとめあげていった。それでも言語化することはとても難しく、文字にして表現しきれなかった部分が多くあるように感じていた。今回、2名の方に実際に現場を見てもらい、ともに評価について検討する機会をいただいたことで、第三者の視点からフィードバックを受けることができた。そのことで、原稿の内容をよりよく理解してもらえるようになったと感じている。また、ACCUの方々にもオンラインで参加してもらい対話の場をもったことで新たな気付きもあった。以下、気付いた点である。

・教員が生徒へのフィードバックする際、どのくらいのポジティブなフィードバックが必要で、どのくらいの改善のための厳しいフィードバックが必要か判断するスキルが求められる
・各生徒に最適なフィードバックは、その生徒にどのくらい（厳しいフィードバックを受け止められる）エネルギーがあるか、教員が生徒とどのくらい信頼関係を築くことができているかが関わっている
・また、教員たちの関係性や振る舞いに矛盾がなく、その姿を生徒たちに見せることができているかが重要である

2年に渡って同じ方向に向かって探究してきた教員の方々に、現場を見ていただきお話ができたのは、とても刺激的な時間だった。